か又舌編より出づるといふ。」

如何んな事を根據として右の樣な事を申したのか解りませんがいづれ善くないといふ事は學ばず己に身につける惡しき癖は一日も早くなほさなければなりません。殊に物摸擬たがる幼兒等をお取り扱ひにならるゝ方々は少しの癖もおなほしになりませんと子供等は何等の間にか同形の癖のつくものの右おもしろいと思ひましたから一寸受け賣りいたします。

幼兒笑話

五つと五才　赤坂　貞子

お向ふの八重子ちゃん　今年取って五つの可愛盛り或日遊びに來られたので「八重ちゃんあなたおいくつ？」と聞きましたら、圓い目を見張って「あたし五つと五才よ」

おんぶして淺草へ　相摸　杉村

「良ちゃん大きくなったらだれをお嫁さんにするの」と五つの良さんに聞きましたら僕春姉さんをお嫁に貰ふの」といひますので「それぢやお嫁さんにしてどうするの」と又聞きましたら「僕おんぶして淺草へ行くの」

僕の搔いゝ處　岡山　吉岡　絹子

五つなる弟の清が「背中がかいゝから母さん早く搔いて」と云つて母にかいて貰ひながら「母さんもっと上よもっと下よ」と云つて居ましたがやがてじれたそうに「母さんには僕の搔いゝ處分らないのかなー」

短歌

山村清

○つゝましげに物言ふ人の袖ふきて紅梅かほる朝の窓かな

○ほのやかに端色なせるしのゝめやいろ〳〵きこゆ初鶯の聲　金森千代

○鐘の音は花の匂ひをそよゆきて若草山にゆふかすむかな

○雪の日や眼をやむ人をいたはりて共にきいつる鶯の聲　朝倉美知

○春若きみどりは雪の白妙にひときわ目だつ姫子松かな

○戀やれし夕べふと見し白梅の光りのまゝに冷たく匂はむ

○なき罪をまい母に得て忍び音に泣くにも似たり朧夜の月　小野春香

○琴の音に匂ひたゞよう梅の欄おや羽うちふる吼雀鳩かな

○朧を涙とふたりそゞろ行く花の下かぜ身に泌み渡る　藤田琴

○波の上を白魚をどる琴の手に銀燭ゆるゝ春風の宵　金陵子

○薄ぐらそ花の下かげ笛とりて吹くとしも無くさまよひし夜や

○友をすてはらからを捨てなまじいに世を咒ふべき都ぶり哉

○朧月木かげに人のかげふたつきえたる跡を花吹雪する　櫻井爾生

○脊におへる稚兒のさしづにたとり行く世の道狹き我さだめ哉

○世はなへて毒霧せまる立山のわめき聞ゆる地獄谷かも　女

○鵯たけし尼君そゞろ經とぢてうなだれ勝ちに鶯をきく

○柔かき若草の野をさまよへるふりわけ髮にふく春の風　千せ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

記　雲

○亡き人の宿世かなしむ春の日を鐘とよみ鳴る花くもり哉

鳳凰堂朝日うら〳〵すき彫りの天女に匂ふうこん櫻や

（投稿隨意）　伊勢白子局區内　眞宮宛